

1993-15
3/5

1993年11月9日(火曜日) 第3636号(改題3233)

インタビュー リベラルとは何か

別の主張との対立の中で意味持つ概念

リベラルとは何か、難しい問題だ。決まった定義があるわけではない。社会党の中に「リベラル会」ができたときも、保守と革新の対立軸の中で出てきたように、「リベラル」とは何か別の主張との対立の中で意味を持つ概念だ。

歴史的に対立軸をさかのぼってみよう。アメリカは移民の人たちの集まりなのだが、黒人だけはここから上昇するルートを開き、都市に流れ、底辺の労働者、失業者となり、さまざまな都市問題が発生した。そして、この現実に対する一つの態度が生じた。

まず、共和党的考え方は、ひとりひとりの自助努力が大切であって、市民としての尊厳を国家、権力によって奪われてはならないという建国の理念にたつた。この結果、小さな政府地方分権を志向するが、初期条件やプロセスとどんなに平等があっても目をつぶり、長期的

Pick up

リベラルと社会民主主義も、2つの異なるものがあるのではなく、リトマス試験紙の酸性とアルカリ性の関係ではないか。

橋爪大三郎東工大助教授。リベラルとは別の主張との対立の中で意味を持つ概念である、として (2面)

証人喚問に際して、社会党内でどう議論がなされ、だれが賛成し反対したのか、明らかにするのが開かれた政党ではないか。

樞国会喚問に抗議して、民放連放送番組調査会の委員長を他の4人の外部委員と共に辞任した清水英夫青山学院大名誉教授 (3面)

芸能はもうからないって言ったけど、「経済」にとっても芸能は必要だと思うんですよ。人間の気持を活性化させる。私たちは「芸能浴」って呼びますけど。

俳優で芸術文化振興連絡会議(PAN)議長の江見俊太郎さん (7面)

東工大助教授 橋爪大三郎



はしづめ・だいさぶろう。1948年生まれ。東大大学院修了。89年から現職(社会学)。「はじめの構造主義」「民主主義は最高の政治制度である」など。「橋爪大三郎コレクション」を勤草書房から出版中。

社民主義とはリトマス紙の酸性とアルカリ性の差。

必要であり、その後競争すべきだとする。公民権運動や偉大な社会建設計画、教育プログラムなど社会投資をしなければならぬ、そのために税金を使わなければならない、自由の基本となる資源の再配分について政府は責任をもつべきだ、という考え方だ。

出発点を同じにしようとする。努力をしない人に多くの資源を与えなければならぬ、その出所が税金ならば、納税者の反乱がおこる。また、まったく措置をとらなければ、プロセスにおける不合理を甘受しなければならず、これも正義ではない。

日本の保守は大きな政府で国権論共有

利点と問題点が両者にあるが、保守主義とリベラルは、どちらも古典的な自由主義社会を維持するための方法論であるという点では一致している。足して、一人ひとりの人間がもう少し、二で割ることもできない、考え方の違いなのである。

日本ではこれまで、アメリカの共和党と民主党のような明確な政策選択があったわけではな

ようということなのだろう。この点に関してならば、小沢氏と変わらぬ。

日本ではもしかしたら、特定の対立事項をめぐって、政党が機能する余地は現時点ではないのかもしれない。もしそうだとするならば、保守とリベラルを分ける基礎は「宝塚の星組と月組の違い」、つまり明確な違いはなく、カラーや体質の違いとなつて現われるのではないかと

政党は実現できる政策提示しなければ

社会民主主義をいうなら、もつと地域を基盤に、国民のだけれどもがタッチ出来る社会民主主義を提起した方がよいと思う。

リベラルと社会民主主義も、二つ異なるものがあるのではないかと

く、同じ尺度の上の違い、相対的なものであって、いわばリトマス試験紙の酸性とアルカリ性の関係ではないか。

例えば、年金や健康保険がパンク状態だといわれている。これに対して、現在の労働者の生活の質を確保できるならば、現状で構わないのか、あるいは安心して老後を送るために、重税を課しても構わないのか、政党は個別の政策において選択を迫られる。選択基準は価値観の違い、利害だ。個別に選択を迫られるとき、政党の姿はおのずと浮かび上がってくる。

政党はどんなプランを出してもかまわない。だが、唯一の約束は、それが実行できること、現実的であることだ。税金を少なく、老後を手厚くというのは無理なことから、実行できないものを公約として掲げてその政党は存在していくことはできないだろう。

『産経新聞』1993.12.1. 日刊

朝刊15面

斜断機

漫画家の小林よしのりが「週刊SPA」連載中の「ゴーマニズム宣言」で、部落差別の問題を取り上げ(十一月十日、十七日号)、被差別部落出身の芸能人が集まった「ザ・部落ワル」を解放フェスティバルを開き、被差別部落出身だからこそおれたちは才能がある、と自分の生まれを堂々と誇ることに、価値観を逆転させるべきだ、という戦略を描いている。これを橋爪大三郎が「毎日新聞」の二十一日夕刊で取り上げ、「考え方としてはまことに正しく、敬服するほかない」と絶賛した。

だがどうもそう単純ではない。アメリカの黒人差別撤廃運動で、肌の色という指標を逆手にとって「ブラック・イズ・ビューティフル」と宣言する運動思想があったが、このときも、それでは差別者と被差別者の壁をかえって高くするだけではないのかという疑問を感じた。しかし黒人は公民権を得ても、黒い肌の持ち主であることを止めるわけではない。そういう条件の絶対的な性格は、いわれなき屈辱感をはねのけるという運動上の必要とされるのだという反論がある。

論がある。だがそのあとは? スターなどの社会的強者の立場にある被差別者が自分の立場を強調すれば、本当に普通の人を差別するものではないか。被差別者をも差別しない状態が期待できるのだから、解放運動が被差別者大衆を半分しかつかんでいない理由の一つは、出自を隠す必要と隠蔽する必要との矛盾をうまく解きえていないことにあるのではないか。(画)

読書

1993
-15
4/5

7・18総選挙の視座

政治意識の変容

橋爪大三郎

自民党羽田派の代表士が時代遅れになったのだ。増上してはいるが、戦後民主主義がほんとうに根を植えた。戦場の民主主義でなかった。なにか別のものがあつた。野党、多くの有権者が感じて、党の提出した憲法内閣不信。選挙は、自民党が任案が、こうして可決された。憲法や日米安保条約といった戦後政治の大柱は、気が付かぬうちに崩れ、ベルリンの壁が崩れたのと同じに崩れ落ちた瞬間である。

四十年近く続いた五五年体制。一党支配の自民党対万年野党の社会党、この体制も、有権者が選択できるはずの不毛の対立は冷戦構造の反映だった。冷戦が過ぎ去り、後民主主義の大柱は、選択

自民党のサブ・カルチャー 戦後世代に違和感

支配を続けていたあいだに、独特のサブ・カルチャー。その集団独自の文化を生み出した。派閥政治、当選回数による年功序列、順送り人事、個人後援会など。金権政治や腐敗は、そのひとつの表れである。このサブ・カルチャーをどうにか脱却して、政治改革のいちばんのポイントは、自民党は、農村と都市の

つて働いた。財界が自民党を支援した。なご理由はいろいろに考えられる。もともと根本的に言えば、自民党が社会的な富の再分配を企及して、有権者の支持を呼びかけた。たかだか、

つて働いた。財界が自民党を支援した。なご理由はいろいろに考えられる。もともと根本的に言えば、自民党が社会的な富の再分配を企及して、有権者の支持を呼びかけた。たかだか、



【はじつめ・だいさぶ】東京工大助教授

たつた自民党に、それなる。と考えるのである。戦後世代(安部世代や全共闘世代)を親に持つ三十歳以下の、もっと若い人々の感じ方はまた違っている。彼らは自民党カルチャーに、政治そのものに拒否反応を示す。彼らは、日本は経済大国だから、日本は経済大国だから、政治が自分の生活を支える。このように、改革の担い手が見つかからないまま、日本の民主主義は、詰まりの状態にあつた。

党内のことだけを考えると、自民党のサブ・カルチャーが、国際的な責任に認められなくなっている。自民党の改革派が党を飛び出した。これが原因だ。こうして始まった今回の政界再編劇は、どのような変化をもたらすのだろうか。

▲次回はいよいよの予定

7・18総選挙の視座

政治意識の変容

橋爪大三郎

日本新党が躍進する。選挙のプロにも票は、既成政党の足踏みが目立った都議会議員選挙。この結果から七月十八日の総選挙を占うのは、さしつかえなく、有権者が予想以上に変化を望んでいる。ただ、変化は、

噴き出した変化の底流 見極めるのは有権者

選挙のプロにも票は、既成政党の足踏みが目立った都議会議員選挙。この結果から七月十八日の総選挙を占うのは、さしつかえなく、有権者が予想以上に変化を望んでいる。ただ、変化は、



心算が飛び出した。五月末に逆説は、こう考えると納得できる。国会での動きが有権者の投票行動と呼吸すれば、政界再編は、秋口にも党を割るつもりだった。この流れを察した守旧派が、妥協を

の審議も進み、五月末に逆説は、こう考えると納得できる。国会での動きが有権者の投票行動と呼吸すれば、政界再編は、秋口にも党を割るつもりだった。この流れを察した守旧派が、妥協を

(東京工業大助教授・社会学)

